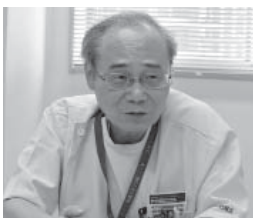


ICLSコースについて

日本救急医学会認定ディレクター 今西正巳医師

6月26日、城山病院で第10回ICLSコースが開催された。ICLSコースとは日本救急医学会が定めた医療従事者のための蘇生トレーニングで、今回は初めて呼吸器アレルギー医療センターと合同で行われ60名(インストラクター28名、受講者24名、タスク8名)が参加。ディレクターを務めた今西医師に話を聞いた。



リハビリテーション科部長
大阪府医師会認定ディレクター
日本脳神経外科学会専門医
日本救急医学会指導医
日本救急医学会専門医

ICLSコースとは

ICLSとはImmediate Cardiac Life Supportの頭文字を取った略語で、突然の心停止の傷病者に出会った時に医療従事者が「Immediate(すぐに、間髪をおかない)」「なチーム蘇生を習得することを目標としています。心停止はどの場所においても起こりうるもので、蘇生を開始するまで少しの猶予もありません。今回は医師、看護師、理学療法士、検査技師、事務職員など様々な部門で医療に従事する人たちが、6人1組のチームになってシミュレーション実習を繰り返し、ほぼ1日かけて必要な技術とチーム医療を身につけました。



6月26日のICLSコース実習風景

心停止の人がいたら？

このICLSコースは二次救急処置の習得が目標ですが、この基本になるのがBLS(Basic Life Support)です。心停止の早

期判断と行動ができ、質の高い成人の心肺蘇生、AEDの安全・迅速な使用法で、いわゆる一次救命処置と言われるものです。もし、あなたの目の前にも心停止の人がいたらどうしますか？傷病者に何らかの反応がみられるまで、または救急隊に引き継ぐまで心肺蘇生を続けなければなりません。

災害訓練も重要

私は脳外科が専門ですが、これまで奈良県総合医療センター(旧奈良県立奈良病院)救命救急センター、奈良医大高度救命救急センターに長く勤務し、2002年大阪大学でACLS(Advanced Cardiac Life Support)コースを受講したことをきっかけに、翌年当時勤務していた奈良県立奈良病院でICLSコースを立ち上げました。その後、奈良県全域の医療機関にこれを広め、さらに災害拠点病院である奈良県立奈良病院で災害訓練を奈良県で初めて行いました。この時は、近隣で重大な事故(災害)が起きたことを想定し、看護学校の学生さんたちに患者役をしてもらいました。初めての訓練では、準備した傷病者数とトリア

ジタッグの数が合わないなど、情報が迅速かつ正確に伝達されないことを実感し、以後私の勤務異動先でも開催して、職員の方でもスキルアップ、意識改革を行いました。また病院が被災した想定訓練は病院の規模が大きい(有床数が多い)ほど訓練は難しくなりませんが、東南海地震が想定されていることもあり、診療体制が継続できるかなど様々な問題・課題を常に考えておかねばならないと思っています。さて、当院では9月24日(土)に病院が被災し、ライフラインの一つ「電気」の供給ができなくなっただけを想定し、訓練を行う予定です。10階建ての当院で「電気」の供給が途絶えるとどのようなことになるか、想定外なことも発生することもあるでしょう。昨今、全国様々な場所ですら災害が発生しており、少しずつ全職員のスキルアップ・意識改革を目標として訓練を行うことが必要と思っています。最後に私は現在回復期リハビリ病棟で勤務しており、急性から自宅退院に向けての診療に携わっております。急変時対応も含め患者様の早期の回復を願って勤務しております。